

# サントニーニョと千羽鶴

## — 広島のフィリピンコミュニティに関する予備的考察 —

高畑 幸

### 1 問題の所在

#### 1-1 広島への視座

2004年末現在、日本には約20万人のフィリピン人が暮らしている。彼らは日本で第4のエスニック集団であり、日本人との結婚により定住した人びとが多いため、大都市のみならず地方都市や農村部にも居住する。本稿では、フィールドとしての「広島」に目配りしつつ、第1に、広島県内および広島市内におけるフィリピン人の分布を明らかにし、第2に、在広島フィリピン人の組織活動事例を紹介し、第3に、地方都市におけるエスニシティのありかたについて考察することを目的としている。なお、私は2006年3月から広島に住み始めたばかりである。本稿はいまだ未知の部分が多い対象について拙いスケッチを描こうとしているもので、事実発見および予備的考察に限定されることを付言しておく。

はじめに私事ながら、思い出話をさせてもらいたい。私が「広島」に触れる最初のきっかけになったのは1994年の出来事だ。1991年から1996年にかけて広島地方裁判所を舞台として繰り広げられた、日本人父とフィリピン人母フロリダさんから生まれた国際婚外子ダイちゃんの日本国籍確認訴訟である。

1991年9月18日に生まれたダイちゃんだが、その数日前に日本人父Aさんが広島市西区役所で「胎児認知」の届け出を口頭で行った。当時、Aさんには日本人妻子があり、フロリダさんとは婚姻関係がなかった。しかし、当時、不法残留だったフロリダさんの出生証明書がないということで届け出は受理されず、ダイちゃんはフィリピン国籍となった。母子ともども不法残留である。もし胎児認知できていれば、彼は出生時から日本国籍だったはずだ。「口頭での胎児認知届の有無」が争点となった事件である。しかし、何度か公判を繰り返した後、西区役所職員がそれまでの証言を翻して「(ダイちゃん出生前に) Aさんが胎児認知届に来た」と法廷で証言した。これでダイちゃんの胎児認知が認められ、彼は日本国籍を取得できた。

この裁判の和解がなされる数ヶ月前の1996年7月30日、法務省は「日本国籍の子どもの親権を持つ外国人親に定住者の在留資格を与える」との通達を出した。これにより、フロリダさんのように日本で日本国籍の婚外子を出産した不法残留の外国人に定住の道が開かれたのである。それまでは、たとえ日本人と結婚して

いても、ひとたび離婚すれば「日本人の配偶者」のビザが更新できなくなり、子どもを連れてフィリピンに帰国せざるをえなかったり、そのまま日本で子どもを育てながら不法残留を続ける外国人母さえいた。しかし、この通達によって、多くの外国人親が日本で日本国籍の子どもを育てるという当たり前の行為ができるようになったのである。この「ダイちゃん事件」は、日本における外国人の定住化を加速させる意義深い出来事だったと思う。

さて、私はこの事件で、1994年から1995年にかけて法廷通訳人として広島地方裁判所に通っていた。ダイちゃんの母フロリダさんが証言をした合計3回の公判で通訳をしていたのである。ダイちゃん母子は当初、広島に住んでいたのだが、後にAさんの転勤に伴って大阪府豊中市に移り住んだ。その頃私も同じ市内に住んでいたため、ダイちゃん事件の発生から終結まで、彼らとは友人として、また支援の会の広報担当として、友だちづきあいをした。まだ若い大学院生だった私にとって、広く「世間」を教えてくれた思い出深い裁判だ。

もうひとつ、広島で思い出すことがある。これも裁判関係だ。私は1993年10月から2006年3月までの12年半、大阪を中心にフィリピン語の法廷通訳人をしてきた。この間、およそ400件の刑事事件を担当したのだが、その中で一番日本語が上手だったフィリピン人被告人は、忘れもしない、2004年に担当したBさん。広島県に属するある島でフィリピンパブを経営していたママである。当時30歳だったBさんは15歳の時に来日したのだという。興行ビザにより来日するためには年齢が23歳以上でなければならない。彼女の年齢と来日時期を考えると、おそらく最初は観光ビザで来日し、不法残留をした後に日本人男性と結婚して長期滞在していたのだろう。Bさんは通訳の私が必要ないくらいに日本語が堪能だった。その日本語能力が、彼女がわずかに15歳で来日し、接客業をしながら世間の荒波に揉まれて当時まで15年間、日本で生き延びてきたことを雄弁に物語っていた。

私はこの3月に広島へ来たばかりだが、以上の2事例を思い出すにつれ、これまで私が生活してきた大都市・大阪とは違う何かが地方都市・広島にあるのではと考えるようになった。例えば、ダイちゃんの父・Aさんにとって広島は単身赴任先、すなわち支店都市だ。また、周りにフィリピン人がほとんどいなかったからこそBさんの日本語能力はあれほどまで伸びたのではないか、など。こうした問題意識を頭の隅に置きつつ、広島のフィリピンコミュニティについて予備的観察および考察を進めていきたい。

## 1-2 データの出所と先行研究：「フィリピン人の組織」を中心に

本稿の議論は、統計資料（在留外国人統計など）、在広島フィリピン人組織のフィールドワーク（2005年5月）、キーパーソンズへの聞き取り（2006年5月～10月）、そして先行研究文献に依拠している。はじめに、「広島のフィリピン人」に関する先行研究を見ていこう。

ここでは、リサ・ゴウ・鄭暎恵（1999）、水越紀子（2006）、定松文（2004）を参考にしつつ、広島のフィリピンコミュニティのありかたについてまとめておく。

日本のエスニシティに関する研究でもフィリピン人に関するものはあまり多くない。そのなかでも地方都市在住者に関する研究は特に少なく、広島ーフィリピンというキーワードでは、以上の4研究者による著作に限られるものと思われる。

フィリピン人宣教師で市民運動家のリサ・ゴウと社会学者・鄭暎恵の対談をベースにした『私という旅』(1999)は、日本に来て初めて「被差別」のまなごしを味わったゴウが日本社会や日本の外国人支援運動を批判的にとらえ、それを鄭との対談のなかで「ジェンダー・レイシズム」のキーワードを使いつつ読み解いていくものだ。

事実関係だけを紹介すると、ゴウは1992年にNCC平和と人権ヒロシマセンターに宣教師として招かれて広島に来た。そして、1995年まで広島に滞在し、中四国地方各地のフィリピン人たちとの対話を繰り返す。彼女は、日本のテレビドキュメンタリー番組でのフィリピン人女性の描かれ方がステレオタイプであるとして抗議運動を展開し、そのなかからニュースレター『Pinay Ito! (私はフィリピン人女性!)』を発刊した。各地のフィリピン人女性たちが寄稿して作った季刊誌だったが、1993年8月から1995年12月の間に4号が出ただけで休刊となっている。また、1995年5月15日～17日、ゴウが組織して、第1回在日フィリピン女性交流会が行われ、札幌、秋田、栃木、京都、大阪、徳島、香川、福岡などからフィリピン人女性が広島に集まって自分たちが置かれた状況を話し合った。それを機会に、「在日フィリピン女性ネットワーク」が結成された。しかし、ゴウはこの後に広島を離れ、さらには1998年には日本を離れて活動拠点をアメリカに移してしまう。

このように、ゴウは広島に滞在した4年間に目覚ましい活動と活躍をしたのだが、それが現在まで引き継がれているかといえばそうではないようだ。上記の共著書が発刊された1999年には、ゴウも鄭もすでに広島を離れている。活動家のゴウは、広島を中心に在日フィリピン人女性の相互扶助ネットワークを作ろうとしたのだろうが、その種を蒔いた後にこの「場所」から離れてしまったことで、それが芽となり樹木とならなかったのではなかろうか。詳しくは後述するが、私が今年5月～10月に、広島に20年以上在住するフィリピン人女性や外国人支援団体のキーパーソンズに聞き取りをしたところ、広島市内にはフィリピン人女性の組織が「ない」との答えを複数から聞いた。これまで大阪や名古屋で多くのフィリピン人女性の「組織」を見てきた私からすれば不思議なことである(例えば、高畑、2003:270-271)。

ここで疑問となるのが、「なぜ広島市内にはフィリピン人女性の組織がないのか」である。カトリック司祭の中川明(2003)が書いているように、日本においてはカトリック教会が最初に新来外国人の支援に着手し、特に同じカトリック信徒であるフィリピン人の「問題」にカトリック教会は重要な役割を果たす。同時に、日本各地のカトリック教会が、その場所のフィリピン人組織の発祥地となることも少なくない。広島市ではカトリック幟町教会が中心的な大規模聖堂だ。この英語ミサに参列するのはフィリピン人が9割だが、この教会にフィリピン人

「組織」はあるのかと聞いても、「ない」と言われた（2006年3月5日のフィールドワーク）。

次に、水越紀子（2006）は、広島におけるフィリピン人の状況について1980年代を第1期、1990年代を第2期、2000年代を第3期として経年変化をまとめている。年を追うごとにフィリピン人の定住化が進んで、日本人が「支援」をしなくとも彼ら同士のネットワークでさまざまな問題解決ができるようになったという。水越はこの研究のなかで、広島県内にあるフィリピン人グループ3つを基点として質問票調査をしている。しかし、このうち「組織」の形をなしている（役員体制がある）のは1つだけで、おそらく本論で後に紹介する福山市内のフィリピン人友好協会であろう。あとの2つは、組織というよりは複数の友人同士が集まったネットワークである。

定松文（2004）は、フィリピン人組織について私が持つ疑問にいくつかの答えを示してくれる。定松は、首都圏のある都市（Xとする）と、地方都市Y（とあるが、文脈からしておそらく広島県内の都市）およびZ（おそらく広島市）のフィリピン人組織のありかたとリーダーのプロフィールを比較しながら、首都圏と地方都市の違いを明らかにしている。首都圏のXは、カトリック教会を基盤とした団体で、地方都市のYとZはそうではない。次にYとZについて見ていくと、Yは広島市よりも人口規模が小さく隣近所とのつきあい（対面的人間関係）が残っていると思われ、さらにはYでは部落解放運動が地域に根付いている（定松、2004：64）。逆に、Z（おそらく広島市）では、1993年ごろから2～3年の間、フィリピン人女性の会があったというが、当時は参加者が離婚しはじめる時期にあたり、また生計維持のためメンバーの多くが仕事を始め、会としての存続が難しくなったのだという（定松、2004：66）。

これらの事例から、定松は、フィリピン人に「組織」が存在するためには、リーダーの「高学歴と夫の仕事の安定性」が必要だという。高学歴ということは、出身階層が比較的高く、勘が良く、物怖じせず、英語が上手で、ボランティアの習慣がある。日本人ボランティアの特徴と変わらない（定松、2004：68）。また、地方都市YとZを比較して、Yでは大きすぎない人口規模と地域社会の機能、さらには部落解放運動の存在が強みだという。既存の地域運動に外国人が新たに参入した形である。それに比べてZ（おそらく広島市）は、既存の社会運動が複雑すぎたために、人びとの間に組織離れが起こり、「組織というだけですでにイデオロギー集団のイメージを持つなど、NPOが育ちにくい、あらたな運動組織が生まれ育ちにくい傾向がある」という（定松、2004：69）。

それでは、広島県のなかでもフィリピン人の人口量が最も多い広島市に「組織」がないのはなぜだろう。その原因は定松の指摘する3要因（リーダーの存在、地域社会での対面的人間関係、市民運動との連携）なのか、それとも、そもそも組織は必要とされていないのか。あるいは、エスニック組織の存在／不存在を観察するなかで、何か「広島のなるもの」が見えてくるのだろうか。本論では、定松（2004）に依拠しつつ、広島におけるフィリピン人の「集まりかた」を考えてい

きたい。

## 2 在日フィリピン人の空間的配置と広島的位置づけ

### 2-1 日本における4大エスニック集団

日本においては、外国人登録者数が2004年に197万人に達した（平成17年版在留外国人統計）。国籍別の人数で10万人以上のものを見ると、1位が韓国・朝鮮（60万7419人）、2位が中国（48万7570人）、3位がブラジル（28万6557人）、4位がフィリピン（19万9394人）となっている。この順位は過去10年ほど変化がなく、上記が日本の4大エスニック集団だと言えるだろう。フィリピン人は日本で4番目に大きなエスニック集団となる。

西村雄郎（2006）は2000年国勢調査データを用いて、上記4大エスニック集団と、比較対象としてアメリカ籍の人のびとの日本国内における居住地分布を分析している。以下、フィリピン人に絞って分析をみると、フィリピン人は東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県といった首都圏に全体の43.3%が暮らし、福島、新潟県から愛知・岐阜県の間にもその多くが暮らしている（西村、2006：5）。他のエスニック集団と比べてフィリピン人に特徴的とされるのは、女性の多さである。中国人が男女ほぼ同数、アメリカ人は男性が4分の3をしめるのに対し、フィリピン人は女性が4分の3をしめる。また、フィリピン人は年齢層も20～30代に全体の4分の3がおさまる（西村、2006：7）。

フィリピン人は全国に分散して居住しているものの、首都圏にその数が多いことは上述した。アメリカ人も同じく首都圏への集中が見られるのだが、その就労形態が違って来る。フィリピン人は「卸・小売・飲食業」や生産工程労働者が多く、就労形態も臨時雇いが多い。それに対して、アメリカ人は男性率、常雇率が高く、「サービス」業に従事する「専門・管理・技術職」が多いという違いが見られる。以上をまとめたものが下の表1（西村、2006：10）である。

	韓国・朝鮮	中国	ブラジル	フィリピン	アメリカ
2004年人口	60.7万人	48.8万人	28.7万人	19.9万人	4.8万人
外国籍市民人口に占める比率	30.8%	24.7%	14.5%	10.1%	2.5%
1996年からの増加率(倍)	0.9	2.2	1.6	1.5	1.1
居住地域	京阪神圏を中心に戦前からの4大工業地帯を結ぶ地域に分散	首都圏に集中。これ以外は全国に分散	中部・北関東地域	首都圏に集中。これ以外は愛知以南	首都圏
住居	持家	民営借家・「住宅以外」	民営借家・給与住宅	民営借家・「住宅以外」	民営借家・給与住宅
5年間常住率	60.7%	21.0%	13.7%	26.2%	23.7%
男性率	57.9%	51.5%	61.1%	25.3%	73.5%
年齢構成(20-39才率)	35.1%	62.0%	52.4%	77.6%	45.1%
単独世帯率	32.6%	61.3%	45.6%	71.8%	56.8%
常雇・臨時雇比率	49.1%:12.3%	59.4%:27.6%	67.4%:30.8%	46.3%:46.2%	71.1%:12.4%
産業別就労者率	卸・小売・飲食(31.2%) サービス(23.4%)	製造(35.6%) 卸・小売・飲食(28.3%)	製造(80.9%)	卸・小売・飲食(38.6%) 製造(23.4%)	サービス(72.3%)
職種	生産工程(29.0%)、販売(18.0%)、サービス(17.0%)	生産工程(45.0%)、サービス(17.0%)	生産工程(89.3%)	生産工程(45.0%)、サービス(31.2%)	専門・管理・技術(65.6%)

ここで、韓国・朝鮮、中国、ブラジル、アメリカとの比較においてフィリピン人の特徴をまとめておくと、首都圏から愛知県の間への集中、民間借家居住、女性の多さ、20～30代の多さ、単独世帯率の高さ、生産工程とサービス業への従事、となるだろう。

以上の「日本におけるフィリピン人」像は、その単独世帯率の高さからみて、いわゆるフィリピン人エンターテイナー（フィリピンから6ヶ月の興行ビザで日本へ出稼ぎに来る単身の女性たち）を相当数含んで描き出されるものと推測される。彼女らはたしかに、2004年までは年間約7万人が入国し、常時4～5万人が外国人登録をしていた。しかし、2005年2月に法務省令が改正され、興行ビザの発給基準が厳格化された結果、フィリピンからの若年女性興行労働者の数は激減した。2005年末現在の外国人登録数を見ると「興行」資格で滞在するフィリピン人は2万3643人にすぎない。2004年はその数が5万691人だったので、半分以下になったわけだ。この数は将来的に再び激増するとは思えないため、日本では「フィリピン人＝エンターテイナー」とステレオタイプ化できる時代が2005年で終わったと言えるのではなからうか。むしろ、かつてエンターテイナーとして働きに来て、就労先で知りあった日本人男性と結婚し、日本全国に分散して定住した人びと、すなわち定住層がいかに定住し日本社会へと統合されていくのかという点に「問題」は移行してくるのではないだろうか。以下の議論では、「フィリピン人」「在日フィリピン人」と言う場合には、主にこの「結婚による定住」をした人びとを想定している。次に、広島におけるフィリピン人の人口概況を見ていこう。

## 2-2 中四国地方の拠点としての広島

言うまでもなく、広島は中四国地方の中心都市である。以下に、広島県内および広島市内のフィリピン人の状況について菅野正之（2006）に依拠しつつまとめ、中四国地方の外国人およびフィリピン人集住地としての広島を明らかにしたい。

広島県の外国人登録者数は、1985年に1万9369人であったのが2004年には3万5219人と、この9年間で約1.8倍となった。広島県内では、1990年代前半に外国人登録者が急増し、94～95年に減少し、その後90年代後半には増加率2%台を推移し2000年代に入ると増加率4%台を保っている（菅野、2006：249）。1990年の入管法改正を契機とした南米からの日系人の増加がそのまま地域の外国人の急増に結びついているのが広島県だと思われる。

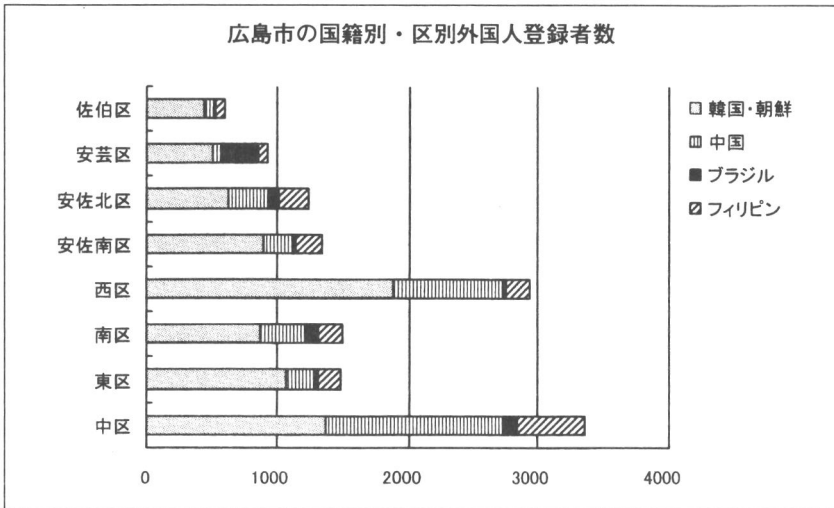
2004年末現在の広島県の外国人登録数を国籍別にみると、1位が韓国・朝鮮（1万2088人）、2位が中国（8668人）、3位がブラジル人（5002人）、4位がフィリピン人（4342人）と、全国レベルでの順位と変わらない。年次推移をみると、韓国・朝鮮以外は緩やかに増加傾向が見られる。韓国・朝鮮籍を一応、オールドカマーと考えると、広島でも全国的傾向と同様にオールドカマーが減少しニューカマーが増加していることが読みとれる。

また、広島におけるブラジル人の多さが目を引く。広島県内のブラジル人は

2004年時点で5002人と、日本最大のブラジル人口（6万3335人）を抱える愛知県と比べるとその数は10分の1以下なのだが、中国・四国・九州に限ると、ブラジル人登録者数は広島が最大で、2位の岡山県（1556人）を大きく引き離していることから、広島県は西日本における最大のブラジル人居住県であり、ブラジル人居住の「西限」だと言える（菅野、2006：250）。

広島県内の市町村別外国人登録者数では、広島市が最も多く1万4497人、次いで福山市（4251人）、東広島市（2938人）、呉市（1981人）、海田町（1023人）の順である（菅野、2006：253）。当然ながら、1位の広島市が2位以下を大きく引き離している。広島市が中四国地方のなかでも外国人の集中する都市と言えよう。

次に、図1は広島市内の国籍別・区別外国人登録者数を表したものである。



2004年現在、広島市には1万5356人の外国人が登録されているが、国籍別・区別の人口をみると、ある程度の偏りが見られる。すなわち、韓国・朝鮮人は西区に、中国人は中区に、ブラジル人は安芸区に、フィリピン人は中区に多く居住している。私がかつて在日フィリピン人コミュニティの調査をしていた名古屋市でも似た傾向が見られた。すなわち、中国人とフィリピン人は中区（都市中心部）に、韓国・朝鮮人は中川区（都市中心部に近接する区）に、ブラジル人は港区（都市中心部から離れた場所）に多い（高畑、2006 a：293）。ここから類推すると、中国人とフィリピン人は都市的な場所や産業（繁華街、商店など）に従事し居住する傾向があり、韓国・朝鮮人は都市部だが中心から少し離れた住宅地に住み、ブラジル人は工場の生産工程での就労が多いために都市中心部から離れた工場地帯に多く住むという、都市に住む外国人の空間的分布が見られるのではなからうか。

最後に、フィリピン人の人口量についてまとめておくと、上述のとおり、広島

県内には4342人、広島市内には1647人（2004年現在）が登録されている。広島県内においては、広島市にフィリピン人が最も多く（1647人）、次いで福山市（572人）、呉市（369人）、東広島市（283人）と続く。福山市のフィリピン人人口は広島市の約3分の1なので、広島市の多さは際だっている。また、広島市内ではフィリピン人は中区（515人）が最も多く、次いで安佐北区（231人）、安佐南区（203人）、西区（185人）と続くが、安佐北区と中区には2倍の開きがあることから、広島市中区への集中は明らかである。次に、広島市中区でフィリピンレストランが複数立地する場所へと目を移していこう。

### 2-3 流川のフィリピンレストランを歩く

広島市中区にある流川・薬研堀エリアは、広島随一の歓楽街だと言ってさしつかえないだろう。官邸主導で行われている「大都市等の魅力ある繁華街の再生のための連絡調整会議」（官邸ホームページ参照）でも、東京・歌舞伎町、札幌・薄野、名古屋・栄、大阪・ミナミ、福岡・中洲などと並んで、全国11の再生対象繁華街のひとつに数えられている。もちろん、広島では、対象地区は薬研堀・流川地区だけである。

流川・薬研堀エリアは、広島市中区にあり、北を仏壇通り、南を平和大通り、東を駅前通り、西を中央通りに囲まれた一角である。2006年7月27日にフィールドワークを行ったところ、フィリピンバブおよびフィリピンレストランが集まっているのは、流川・薬研堀エリアの南西部（流川町南部～田中町付近）であった。私が歩いたところ7～8軒のフィリピンレストランが見つかった。流川にあるフィリピンレストランDに入ったときのことを、私は在日フィリピン人向けエスニックメディア『Kaibigan（「友人」の意味）』に、短いエッセイを書いた（高畑、2006c:7）。

…（フィリピン料理店の）ひとつ、Dに入ってみた。店内は、どう見ても和食の店で、カウンターの前にはネタの陳列ケースがあるから、もともと寿司屋さんだったのかと思うほどだ。そして、カウンターの横にはサントニーニョが。和風の店内にひととき目立つ、派手なイエス・キリスト像だ。これを見ると、フィリピンの店なんだなとわかる。広島に来てから仕事で忙しく、フィリピン関係の場所から足が遠のいていた私を、ふわーっと懐かしさが包んだ。そしてその横には千羽鶴が垂れ下がっている。平和のまち・広島文化だ。

経営者のKさん（フィリピン人女性）は18年前に来日した。最初はタレントさんである。日本人男性と結婚してから、スーパーの惣菜調理、レストランの洗い場、ケーキ屋などでパートの仕事を転々としていたが、子どもに手がかからなくなったのを機に、流川に隣接する薬研堀で2002年にフィリピンレストランをはじめた。その後、より広い店舗を探して今年3月にこの場所に移ってきたのだという。カウンターに10席、4人



がけのテーブル席が4つ。そのほか、お座敷もあるのだが普段は荷物置き場になっている様子だった。

…店内はまだ客が少なく、Kさんがヒマそうなので話を聞いた。Kさんはパンパング州出身で、来日以来ずっと広島に住んでいる。今はこのレストランが主な仕事で、午後6時から明け方4時まで店を開けている。タレントさんの同伴出勤から店が引けた後の食事まで、繁華街で働く人びとのおなかを満たしている。この大きさの店舗では家賃も相当かかるだろうし、あまり儲かっていないのでは…と心配して聞いてみると、「本当に、自分のお店を持つって、たいへんですよ。でも、お金だけでなく、(お店を経営することでできる)人間関係もありますから、仕事は辛くないです」とのこと。名古屋のフィリピン料理屋では実質的に二重価格になっており、日本人の客がタレントさんを連れて行くときの金額と、タレントさんが単独で来店するときの金額は違う。フィリピン人向けには、ごはんとおかず2品で500円というのが名古屋の相場だった。Kさんに聞くと、広島ではさらに安く、400円で1食を食べさせることが多いという。フィリピンからきたタレントさんは現金をあまり持っていないので、「お金がないから、ご飯とおかず半分にして食べさせて」と言ってくるのだという。儲け重視ではできない仕事だ。

サントニーニョ(右写真)は直訳すれば「幼きキリスト像」で、フィリピンでは家内安全や商売繁盛を祈って家や商店にこのキリスト像をまつる習慣がある。日本国内のフィリピン食材店でも、よくこの像を見かける。Dの店内でサントニーニョが見下ろすカウンターの上には、大量の小銭が入った大きなビンが置かれていた。Kさんに聞くと、お客さんが釣り銭を「寄付」してくれたのを貯めているという。ビンが一杯になると銀行に持っていき、そのままフィリピンの貧困児童支援団体に送金していると聞いた。



この店内に見られるサントニーニョをフィリピン文化の移入、千羽鶴を広島文化の受容と読み解くと、フィリピンへの「寄付」はトランスナショナリズムと言えよう(小ヶ谷、2004:44-45)。小ヶ谷は、滞日フィリピン女性の組織活動には、フィリピンへの寄付活動が多く見られると観察し、それをトランスナショナリズムの視点から議論している。小ヶ谷が引用するGoldringによると、トランスナショナリズムは「地位を主張し安定させ

る」プロセスと定義づけられる。家族の再生産が経済的・政治的に不安定であること、ホスト国における人種化された排除の存在、そして出身国における社会的排除（特に女性の場合）の3条件があるとき、トランスナショナルな（多くは出身国との）紐帯や多様な階級、ナショナル、人種に基づくアイデンティティを維持することで、トランス・マイグラントが自分たちの経済的状況を改善ないしは維持し、社会的立場を強化ないし上昇させ、自尊心を揺るぎないものにする다고されている（小ヶ谷、2004：45）。

すなわち、この店内には出身文化の維持装置があり、土着文化の受容があり、そして「社会的立場や自尊心」を維持する装置の3点が揃っているのだ。こうしたモノを観察するだけでも、彼女らの置かれた「立場」が示唆的に現れてくる。次に、フィリピン人の組織について観察していこう。

### 3 広島でのフィリピンコミュニティ

#### 3-1 経年変化

過去10余年にわたって広島でフィリピン人女性を対象に聞き取り調査をし、また彼女らをさまざまな形で支援してきた水越紀子（2006）は、広島におけるフィリピン人の状況について、3つの時期に分けて経年変化をまとめている。

第1期は1980年代で、ホステス・売春婦イメージの定着期である。当時、フィリピン人女性は、興行ビザでダンサーや歌手として入国するケースと、短期観光ビザで入国してそのまま不法滞在で働くケースがあった。当時はまだ外国人女性、特に興行労働者の就業環境は悪く、雇用者による監禁や暴力が社会問題となった。

広島でも、1988年3月にフィリピン人ダンサーが勤め先の店長を刺すという事件が起きた。これに呼応して、ミニコミ誌『家族』を発行していた「家族社」は、フィリピン人女性被告人の担当弁護士と協力体制を作り、外国人出稼ぎ労働者の現実を誌面で取り上げた。また、1980年代、東北地方の農村部では行政主導の国際見合い結婚でフィリピン人が嫁いできたが、広島でも神石郡油木町の町会議員が推進した見合い結婚で2人のフィリピン人が農家へ嫁入りをした。これも『家族』の記事となった（水越、2006：311）。まとめると、第1期は外国人女性が「問題化」された時期と言える。

第2期の1990年代は、結婚による定着期である。日本全国で日本人男性とフィリピン人女性の結婚が増え、結婚によりフィリピン人は定住していった。その数は、1994年から近年まで年間約6千件である。日本人男性と結婚して定住する「意味」について水越に語ったNさんによると、日本人との結婚は「移民」となるための手段なのだという。そのため、Nさんは「（日本人と）離婚すると失敗だというけれど、決して失敗ではないと思う。日本で住むこと、働くことは、彼女たち（フィリピン人女性）からしてみれば成功だ」という（水越、2006：318）。結婚への動機づけはどうか、[問題化]の時期を経て日本でフィリピン人が定住する時代となったのである。

広島県内では各地で行政主導の「国際交流」「国際理解」がさかんになった。

フィリピン人の多い地区では、公民館などで日本語講座やフィリピン人女性による料理講習などの取り組みが見られた。福山市では、フィリピン人女性たちの運動に触発され、フィリピン人の母親と小学校教員が協力して、子どもたちのための「フィリピンの集い」を定期的に行った（水越、2006：311-312）。まとめると、第2期はフィリピン人の日本社会への溶け込み期と言えよう。

そして第3期が現在で、ネットワーク形成による自律的生活安定期である。かつては、日本人と「交流」をし「支援」をされていたフィリピン人女性たちがさらなる自立性と自律性を持って、彼ら独自のネットワークを作って同国人同士で日本での生き残り方法を教え合う活動が展開される。水越によれば、広島での状況も1980年代に比べて安定したという。「初期に来日した先駆者が、(後輩たちの)問題解決を一手に引き受けてがんばってきた時期を乗り越し、それぞれ個人が問題解決できるようになってきた」（水越、2006：312）。一方、日本での家庭生活に耐えきれずに離婚し、ひっそり帰国する人は後を絶たない。水越の聞き取りでは、子どもを連れて帰国した女性がフィリピンでは生活できず再来日するケース、離婚を決意して家庭裁判所に調停を依頼しながら、あきらめて夫のもとへ帰るケースが見られたという（水越、2006：312）。いずれも、根本的な問題は、移民女性の経済的自立の難しさと言えるのではないか。第3期は、さらなる定住化・自立化と移民生活の破綻という2極分化の時代とも解釈される。

### 3-2 事例1：文化紹介的組織

次に、広島のフィリピン人グループの活動事例を2つ紹介したい。



広島でフィリピン文化の紹介を中心に活動しているのが「フィリピナ・カルチュラ・ダンスグループ（Filipina Kultura Dance Group = FKDG）」である。「カルチュラ」はフィリピン語で「文化」という意味なので、日本語に訳すと「フィリピン文化舞踊団」となろう。同グループは10年以上前から活動を続けているとのことだったが、リーダーが何人も交代して

いるため創設年について確認できなかった。彼らは、2005年5月3日に広島フラワーフェスティバル・基町クレド会場でフィリピンダンスを披露していた。当時のリーダーは、広島市近郊に住むCさん。私は日本各地で在日フィリピン人が行う「フィリピンダンス」を多数見てきたのだが、このグループに特徴的なのは、フィリピンの伝統的格闘技「カリ（kali）」を取り入れたダンスだった。

スペイン統治時代以前からある棒術・剣術がカリである。1人ずつ両手に細長

い棒を持ち、それをカンカンと打ち鳴らしながらグループで踊るといったものだ。Cさんにこの踊りの由来を聞いてみたが、彼女も詳しくはわからないまま過去何度か踊っているという。おそらく、この「詳しくはわからないまま」がポイントなのであろう。フィリピンの伝統的舞踊やスポーツをフォーマルな「教育」として学習する機会がないまま日本に移住し、しかし周囲からの異文化提示ニーズにより、自分たちで踊りを練習したり知っている人に教えてもらったりして、「原形」とは何かがわからなくても、また自分たちのパフォーマンスは「原形」と同じではなくても、それを続けていく。日本舞踊に「家元」はあっても、日本で行われるフィリピン舞踊にはそのような権威はない。皆、それぞれに「実践」しているのである（高畑、2006b：II-46）。

私はこのグループが広島市内の代表的なフィリピン人組織なのかと思っていたのだが、今年に入って複数のキーパーソンから「フィリピン人組織はない」と聞いたこと、また「メンバーがアルバイトで忙しくて練習できない」とのこと、FKDGは2006年のフラワーフェスティバルには出演しないと聞いたことから、FKDGも「組織」としては弱体化して不可視的になりつつあるのかもしれない。あるいは、参加者がいわゆる「安定層」で、わざわざフィリピン人だけが寄り合って相互扶助に取り組む必要性を感じない段階に入っているのかもしれない。このような、参加者個人個人のライフコース上の変化が、私たちが考える「フィリピン人組織」のありかたを経年的に変化させているのは、水越（2006）が指摘したとおりである。

### 3-3 事例2：自助組織

2つめの事例が、福山市内で1994年5月に創設されたフィリピン人友好協会（Filipino Friendship Organization = FFO）である。代表者Fさんによると、同協会には、福山・尾道・三原・東城など広島県東部に住み、日本人男性と結婚しているフィリピン人女性たちが参加している。活動目標は、会員同士の相互協力・援助、日本人との交流、両国の国際親善への貢献の3点である（藤原、1996：22；定松、2004：58）。Fさんは、福山近郊に住むフィリピン人女性で、さまざまな理由で外出することが困難なフィリピン人の家庭を訪問するのが活動の中心だという。こうした活動を通じて、会員間でお互いに生活上の考え方、信念、展望などを共有することができる。その結果、Fさんは福山近郊のほとんどのフィリピン人を訪問し、彼女らの約半数は幸せに暮らし、約半数は悲惨な状況にあることを確認した。その「悲惨」さの原因は、日比両国の文化と伝統の違い、そして夫から妻への、フィリピン人であることを根拠とした差別であると語っている（藤原、1996：22-23）。

また、定松（2004：68）は、FFOの「強み」として、日本人配偶者がFさんの活動にもかかわっており、さらにはFさん一家の住む市は部落解放運動が継続して存在する。換言すれば、もともと組織活動の素地がある場所なのだ。こうした社会的環境が、FさんおよびFFOの活動を容易にしている。

2006年5月9日、私がFさんに聞き取りを行ったところ、2006年現在は会員が100名程度とのことだった。上記に引用した記述から約10年を経て、FFOの参加者をとりまく環境がどう変わったのかを聞いてみると、二世代の進学問題が挙げられた。フィリピン人母を持つ子どもたちが高校を中退するケースが増えているという。日本での教育・進路事情に明るい日本人父が子どもの進学指導に力を入れ、日本語能力の問題で進学について情報量の少ないフィリピン人母が比較的「教育熱が薄い」と評価される。日本で高校を中退し、フィリピンに渡ってインターナショナルスクールに通う子どもが出てきたとFさんは語り、しかし、フィリピンの高校を出た子どもたちに将来、どんな進路選択があるのかと心配していた。

## 4 結語～地方都市のエスニックグループ

### 4-1 コミュニティの人口量と組織化

おわりに、広島という地方都市におけるフィリピンコミュニティのありかた、特に組織のありかたについていくつかの知見をまとめていく。定松（2004）は、特定の都市でフィリピン人が組織化されるための条件として、リーダーの存在と資質、適度な人口量による地域社会での対面的人間関係、既存の市民運動（部落解放運動）の存在の3点を索出していた。FFOの事例はこの3要素が揃っていて、1994年の結成以来現在まで組織として続いているのだろう。

それでは、なぜ広島市内では「組織」が存続しなかったのか。定松は広島市をさして「NPOが育ちにくい」（定松、2004：71）としているが、この市民運動要因に加えて、以下の3点が考えられると思う。

第1に、フィリピン人の人口量である。2006年9月に、広島在住20年以上というフィリピン人女性Lさんに話を聞いたところ、彼女は「広島では不法残留のフィリピン人が少ない」と言っていた。広島市内にフィリピン人が1647人という程度では、ビザのない人が「隠れられない」のだろう。すなわち、匿名性の低い社会なのである。結果として、広島で長期滞在できるのは、生活が安定した人びとに限られる。ビザがある人ない人を含めて数え切れないほどのフィリピン人がひとつの空間に寄り集まって、それぞれに何らかの相互扶助活動を繰り広げ、お互いに名前を知る人は限られる…という状況は極めて大都市的なものなのだ。広島市では、フィリピン人移住者という下位文化が形成されるにはいまだ人口量が足りていないのかもしれない。

第2に、交通の利便性である。通常、日本人男性と結婚して定住することが多いフィリピン人は、自分で居住地を選ぶことができない。夫が住んでいた家と一緒に住むことが多い。すると、自宅からカトリック教会やエスニック施設がある都市中心部までの移動手段が問題となる。大都市ならば、鉄道や地下鉄、バスが網目のように整備され、自動車がなくともそれほど不便を感じない。それに比べると、広島はクルマ社会である。自動車免許を持っている人とそうでない人、自動車を所有する経済力がある人とそうでない人との間に、大きな人的・文化的資

源の格差ができ、情報の格差ができるのである。このような物理的条件も、地方都市でのエスニック組織の形成を左右しているものと考えられる。

第3に、地方都市ならではの、新来外国人の早期の土着化である。本稿のタイトルとなっている、流川のフィリピン料理屋でみた「サントニーニョと千羽鶴」が、私にとっては広島市のフィリピン人の土着化をシンボリックに現していると思う。ひとつの推論として、外国人同士で組織活動をするほどの人口量や交通の利便性がないため、嫁ぎ先の家族やその地域へとけ込みやすい場合は早期に土着文化へと文化変容を図る。しかし、嫁ぎ先の夫や家族関係と合わない場合は、それ以外のよりどころがないので（水越、2006：320）、いずれは離婚や帰国といった結末になる。このような、日本人と結婚したフィリピン人女性の「生き方」の二極分化がより鮮明に見えるのが地方都市ではないだろうか。

#### 4-2 今後の課題

これまで、広島のフィリピンコミュニティについて素描を試みたわけだが、今後の課題として考えられるのは、以下の3点である。

第1に、在日フィリピン人の相互扶助活動の都市間比較である。広島という地方都市におけるエスニシティ同士のつながりが、役員体制を持つような「組織」として形成され機能するには、ある程度の人口量が必要となることが示唆された。首都圏や東海地方のフィリピン人が多い地域（かりに「集住地域」としておく）と、広島などの中規模地方都市、そして農山村漁村部という3つに類型化した上で、在日フィリピン人の組織・ネットワーク形成のありかた、キーパーソン存在、受け入れ地域への「統合」、定住化の進行（永住／帰化を含む）といった諸点の比較研究が可能となるだろう。このなかで、都市規模と在住外国人にとっての住みやすさ／住みにくさとの関連が見えてくるのではないか。

また、地方都市でも部落解放運動の実践の有無により、在日外国人の相互扶助活動や組織化にいかなる差異が見られるかを検証することも課題だと思う。換言すれば、日本社会における既存の権利擁護運動（地域社会を基盤としたものと考えられる）が、いかに新来外国人の支援ニーズに答えているかという課題ともなる。

第2に、農山村漁村部の外国人労働者、定住者のありようを明らかにすることである。大都市には確かに多様な人びとが集い、外国人住民の「数」が多い。一方、第一次産業を基盤とする地域でも、労働力として、また「花嫁」として外国人が住み始めているのは周知の事実である。しかし、こうした分野に従事する外国人の就労実態および定住、ネットワーク形成については、いまだ研究が及んでいないようである。農業・水産業が、単に「獲る」だけでなく加工し商品化することが求められる現在、日本国内の農水産物にも外国人の手が必要とされているはずだ。

具体的には、広島のカキ養殖である。広島市内の複数のキーパーソンから聞いたところ、広島湾内のカキ養殖場では、日系フィリピン人が多数従事していると聞いた。日系フィリピン人の場合、日系ブラジル人と同様、日本人親族との血統

をもとに属性的に入学し長期滞在ができるため、興行労働者などに比べてその数や実態が明らかにされにくい。広島を代表する名産品・カキと外国人の労働というテーマは、日本の農林水産業における外国人労働力の必要性がシンボリックに現れる事例だと思う。本論では資料が足りず日系フィリピン人については言及できなかったが、今後の課題としたい。

第3に、ケア労働者導入の見通しである。今後、日本にフィリピンからのケア労働者が導入されると、広島県の都市部および農村部における老人福祉施設や病院などにどれほどのフィリピン人が入ってくるだろうか。ケア労働者の不足は都市部・農村部を問わず深刻である。フィリピンからのケア労働者導入については、2006年9月9日、日比経済連携協定が調印されたばかりで、2007年度から2年間で看護師志望者400名、介護福祉士志望者600名の合計千名を受け入れる予定だという（『中国新聞』、2006年9月12日）。この政府枠組で来日する千名は、あくまでも「志望者」で、日本の国家試験に合格して資格を得るまでは法的には「労働者」ではない。しかし、彼らが6ヶ月間の日本語研修の後、3年間の「実地研修（OJT）」に入ると、この時点がおそらく日本での「外国人ケア労働者時代の幕開け」と称されるだろう。日本で外国人のケア労働者が都市部・農山村部を問わず浸透していく日は遠くない。こうした時に、広島県内（特に高齢化が進んでいる農山村部）で、いかにフィリピン人ケア労働者が受け入れられるか／られないかが、次なる研究課題として興味深いと考えている。

#### 【参考文献】

- 伊藤泰郎（2005）「自治体による外国人住民を対象とした調査について」『部落解放研究』162号、広島部落解放研究所、24-35ページ。
- 今西富幸・上原康夫・高畑幸（1996）『国際婚外子と子どもの人権』明石書店。
- 小ヶ谷千穂（2004）「滞日フィリピン人の社会活動の多属性—日本における『移民／移動の女性化』のコンテクストからの一考察」伊藤るり『現代日本社会における国際移民とジェンダー関係の再編に関する研究—女性移住者のエンパワーメントと新しい主体形成の検討に向けて』平成13年～15年度文部科学省科研費補助金（基盤研究C1）研究成果報告書、お茶の水女子大学、29-52ページ。
- 菅野正之（2006）「広島県における外国人住民の動向と自治体の外国人住民施策」西村雄郎『エスニック・コミュニティの比較都市社会学』平成14年～17年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、広島大学、249-264ページ。
- 笠松千浪（2002）「ジェンダーからみた移民マイノリティの現在—ニューカマー女性のカテゴリ化と象徴的支配」宮島喬・梶田孝道『国際社会4・マイノリティと社会構造』東京大学出版、148ページ。
- 佐竹真明、メアリー・アンジェリン・ダアノイ（2006）『フィリピン—日本国際結婚：多文化共生と移住』めこん。
- 定松文（2002）「国際結婚にみる家族の問題—フィリピン人女性と日本人男性の結婚・離婚をめぐって」宮島喬・加納弘勝『国際社会2・変容する日本社会と文化』東京大学出版、41-68ページ。
- 定松文（2004）「組織化と社会構造—在日フィリピン人女性の組織化と非組織化にみる要因

- 分析」伊藤るり『現代日本社会における国際移民とジェンダー関係の再編に関する研究—女性移住者のエンパワーメントと新しい主体形成の検討に向けて』平成13年～15年度文部科学省科研費補助金（基盤研究C1）研究成果報告書、お茶の水女子大学、53-72ページ。
- 高畑幸（2003）「国際結婚と家族—在日フィリピン人による出産と子育ての相互扶助」石井由香編『講座グローバル化する日本と移民問題第II期第4巻・移民の居住と生活』明石書店、255-291ページ。
- 高畑幸（2006a）「名古屋市中区栄東地区におけるフィリピンコミュニティの地域参加」西村雄郎『エスニック・コミュニティの比較都市社会学』平成14年～17年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、広島大学、291-310ページ。
- 高畑幸（2006b）「フィリピンの学校体育における伝統的スポーツの再生と普及」佐川哲也『アジア地域における身体文化と学校スポーツに関する比較文化的研究』平成14年～17年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、金沢大学、II-38-48ページ。
- 高畑幸（2006c）「サントニーニョと千羽鶴」『Kaibigan』183号、7ページ。
- 中川明（2003）「変容するカトリック教会」駒井洋編『講座グローバル化する日本と移民問題第II期第6巻・多文化社会への道』明石書店、121-140ページ。
- 西村雄郎（2006）「外国籍市民の流入とエスニック・コミュニティ」西村雄郎『エスニック・コミュニティの比較都市社会学』平成14年～17年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、広島大学、1-17ページ。
- 広島県国際企画室（2005）『広島県国際化関係資料』
- 藤原ミラ（1996）「私たちの活動から」『部落解放研究』第2号、広島部落解放研究所、22-23ページ。
- 水越紀子（1996）「広島の女性と外国人」『部落解放研究』第2号、広島部落解放研究所、39-49ページ。
- 水越紀子（2003）「在日フィリピン人女性とフェミニズム—『語られる』日本人を解釈する」『人権問題研究』第3号、大阪市立大学人権問題研究センター、53-65ページ。
- 水越紀子（2006）「広島のフィリピン人—日本人の妻として生きる女性たち」西村雄郎『エスニック・コミュニティの比較都市社会学』平成14年～17年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、広島大学、311-323ページ。
- リサ・ゴウ、鄭暎恵（1999）『私という旅』青土社。
- 首相官邸ホームページ「大都市等の魅力ある繁華街の再生のための連絡調整会議について」  
[www.kantei.go.jp/jp/singi/tosisaisei/kanren.051005/kaigi.html](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tosisaisei/kanren.051005/kaigi.html)

（たかはた さち：広島国際学院大学）